

怪しい鍾乳洞の岩山と鳥葬場をハシゴして一日中一緒に過した私と運転手が、その日の出発点となったバスターミナル脇の食堂に帰ると、朝の女将が二人の顔を見比べクスクス笑いながら迎えてくれた。

「今日は楽しかった？彼は良い運転手だったかしら？」

「ええ、とても。」

私も苦笑いしながら答えた。ついさっき、腹がすいたから何か喰おうぜと誘われて、体よく奢らされたばかりだ。運転手はこの店の常連仲間なのか、店にいた顔見知り達を見つけると一緒に座り込み、「あの日本人女はとんでもない物好きだぜ」とでも話しているらしく、私を指差しながらニヤニヤしている。

身体の内側にはまだ鳥葬場で受けた重い興奮の余韻が残っていた。気持ちは高揚していたが、身体はいつになくグッタリと疲れた気分だ。泊まっている宿の入り口に掲げてある理塘周辺地図には街の郊外に温泉の文字が付いた地名が書かれていたのが思い出された。

8月とはいえ、標高が4千メートルにもなる理塘の夜はかなり冷え込むのだ。ところが昨夜使ってみた宿の共同シャワーは、お湯というより冷たくはない水と言った方が早い液体がシャワーの先から細々と流れ出てくるだけの代物で、ガクガク震えながらやっとの事で身体に付いている石鹸を流した私は、もう懲り懲りだった。稲城みたいに入浴できる施設があったら嬉しいんだけどな・・・試しに女将に尋ねてみたところ、あっさり「在るわよ」と嬉しい返事だ。

「バンザーイ！！遠い？」

「彼のタクシーで行けるわよ。」

勿論、運転手は満面の笑みで飛んできた。

「いくら？」

「往復で30元」

「20元よ！」

宿に寄ってもらい着替えやタオルなどを準備してきた私を乗せて、車が街の目抜き通りを走り抜けようとしていた時だ。西洋人の旅行者がこちらに熱い眼差しを向けているのに気付いた運転手は「ちょっと待ってくれ」と私に告げて車を止めた。キリストのように髪とヒゲを伸ばした大柄な西洋人の青年が車に近づいてくると「ヘイ、タクシーだよな？康定まで行くかい？」と話しかけて来た。仲間達と理塘からタクシーをチャーターして康定ま

で行きたいらしい。勿論、運転手は大乗り気だ。片言ともいえないような英語を操り、康定までは500元だと胸を張って答えている。キリストは「高いな」と顔を曇らせ「ちょっと考えさせて欲しい」というような返事をした。運転手はすかさず手帳の切れ端に自分の携帯番号を走り書きすると「その気になったら電話してくれ」とキリスト青年に手渡した。

長期旅行者は誰もが少しでも長く旅を続ける為に、出来るだけ旅費は切り詰めたがっている。だが運転手にしてみれば舗装状態も良くない悪路を長距離走れば、車も痛むしガソリンも喰う。今朝はバナナの叩き売りで一日私のお抱え運転手になっていた彼が、値下げ交渉に入らなかったところを見ると、500元は譲れない金額なのだろう。

私を乗せたタクシーは街中を走り抜けると、草原を切り裂くように真直ぐ延びる一本道を、風を切って走り出した。理塘は大草原の真ん中にある街なので、どちらの方向に走り出してもすぐに草原の真ん中に飛び出してしまふのだ。車のフロントガラスいっぱい広がる、薄桃色に染まりかけた空を遮るものは何も無い。開け放った窓から吹き込む風が気持ち良かった。

運転手は私を温泉まで送り届けると、2時間後に迎えに来る約束をして一旦街へ戻っていった。

理塘の温泉は細長い建物の中に個室に仕切られた浴室が並んでいて、受付でお金を払うと係りの少年が空いている個室の鍵を開けてくれた。浴室の中は3、4人は一度に入れる広さの湯船と洗い場があり、脱衣場は洗い場の隅のベンチだ。洋服やタオルがかけられるように壁に釘が打ってある。

掲げてある料金表を見ると数人で一緒に入浴する方が割安になるようで、夫婦か恋人同士のカップルや、数人の青年グループなどが一つの個室から出てくる姿もあった。私は一人で使うには贅沢なような広いお風呂場を借り切って思い切り寛いだ。ああ～～～、お風呂ってなんて幸せなんだろう～～～。寒さに凍えながら半端に身体を流しただけの昨夜のシャワーと比べたら天国と地獄だ。

約束の時間まで好きなだけ温泉を堪能した私が、湯気を上げながら外に出て涼んでいると、すぐに運転手が迎えに来てくれた。どうやら私が温泉に入っている間にいいお客を捕まえたらしい。

「明日の朝、康定まで500円で客を乗せて行くぜ。」
運転手の声は弾んでいる。それではあのキリスト君が折れたのかしら？だが私にとってそんな事はどうでも良かった。

「じゃあ私との約束はどうなるの!？」

私が口を尖らせる。先ほどの鳥葬場で知った明日の葬儀を見に行くために、早朝から運転手に車を出してもらった約束をしていたのだ。

「大丈夫さ。小姐を鳥葬場まで送ってから出発するよ。だから俺は葬儀にはつきあえないけどな」

既に気心のしれた運転手兼ガイドになっている彼が、一緒に居ないとは少し心細い気もしたが、とにかく鳥葬場まで行かれるなら問題無い。葬儀は早朝から行われるという運転手の話に明朝6時に迎えに来て貰う約束をして運転手と宿の門の前で別れた。

四川省の日の出は遅い。朝の6時はまだ深夜のように真っ暗だ。運転手はなかなかやって来なかった。やっぱりすっぽかし？業を煮やした私が、宿から運転手の携帯番号に電話をかけると、その電話で目を覚ましたような運転手の声が聞こえてきた。「判ってるさ。すぐに行くから・・・」との言葉にホッとする。多少時間に遅れたところで、こんな土地での口約束はちゃんと来てくれるだけで上出来なのだ。

人気のない街を通り抜けて暗闇の中を鳥葬場に向かう途中、相変わらず運転手は私を怖がらせようとアレコレ言ってくる。そういえば子供の頃はお化けが怖くて夜がくるのが嫌だった。母に頼まれたゴミ捨てに、ドアを開けた数歩先にある団地のダストシュートまで行くのにもピクピクし、暗い部屋で目を閉じるのが恐ろしくて毎晩電気を点けたまま眠っていた頃もあったが、大人になった今、お化けなど少しも怖くない。それより生きている人間の方がずっと危険で恐ろしい事を、もう知っているからだ。きっと暗闇の鳥葬場に近づく事を恐れていたのは運転手の方だったのだろう。

車は昨日訪れた鳥葬場に到着した。7時になってまだまだ辺りは薄暗く、私達の他には誰もいない。暫く車の中で運転手と話しながら待っているうち、徐々に辺りが明るんできたが、それでも葬儀の人達はやって来る気配もなかった。

「本当に今日なの!？」

「だって、彼等がそう言ってたんだから間違いないさ」

運転手はバツが悪そうにそう言うと、そわそわと腕時計を見て「俺は康定に行く客との約束があるから、そ

ろそろ戻らなくちゃならないんだ」と告げた。その話は昨日から聞いていた事だから仕方がない。彼にとってはせっかく捕えた大きな仕事だ。

「いいわ。あなた帰りなさいよ。私は一人で葬儀の人達を待つから」

「ええ!？あんた一人で此処にいるつもりか!？」

運転手はギョッとしたように私を見返した。

「ええ、大丈夫よ」

そうは言ったものの車を降りてみると標高4千メートルの朝は物凄く寒かった。ビョウビョウと草原を吹き渡る風に吹かれ、寒さに耐え切れなくなった私はザックの中からピンク色の雨合羽を取り出して着込んだが、それも大して防寒には役立たない。

「本当に一人で此処にいられるのか!？あんた怖くないのかよ!？」

一緒に車から降りた運転手は何度も繰り返したが、本当に怖くは無かった。

「大丈夫。もしお化けが出てもチベット語は判らないから怖くないよ」

怖くはないが、寒くて寒くて堪らない。私達のいる丘から見下ろすと、少し離れた場所に遊牧民のテントが一つ立っているのが見えていた。火を焚いているらしく白い煙が上がっている。

「ねえ、お願い!あなたが一人で先に帰るのは構わないけど、寒すぎて此処にはいられないよ。あのテントの人にお願ひして、葬儀の人達が来るまで私をテントの中に入れてくれるように頼んでくれない?」

「ええっ!？」

運転手は更にギョッとしたような顔をすると、激しくかぶりを振った。

「何で!？」

「ああいう奴らとは話した事ないんだ」

運転手の拒絶の激しさが不思議に思えた。私から見ればみんなまとめて理塘の住人と思えていたが、もしかすると街で暮らす人間とテントで暮らす人間の間には目に見えない境界線のようなものがあるのだろうか？だが、この時はあまりの寒さにそんな事には構っていらなかった。

「何言ってるのよ!!こうなったのもあなたの責任なんだから何とかして!!」

別に彼に非がある訳でもないのだが、気の悪い運転手は私に言い負かされると諦めたようにテントに向かって歩きだした。

テントの中に顔を入れ話していた運転手が、少し離れて待っていた私を呼ぶと

「中に入って良いと言われたから、ここで葬儀の奴らが来るのを待てよ。じゃあ俺は行くからな」と去っていった。

初めは寒さから逃れたい一心の思いつきだったが、改めてそうしてみるとこの思いがけない展開にはワクワクした。私の様な旅行者が遊牧民のテントに入れる機会など、そうある事ではないだろう。以前初めてこの地を訪れた時にも、案内人の烏里氏の手引きで遊牧民のテントに立ち寄った事はあったが、そんな観光旅行の延長と今回の訪問は私の中でちょっと意味合いが違うのだ。

「你好！」中に足を踏み入れると、テントの中には姉妹なのか嫁姑の関係なのか歳の違う二人の女性と子供達が居た。歳若い女性の方が、特に歓迎する風でもなく私をテントに招きいれると中央にあるストーブの脇に座らせてくれた。テントが風を防いでくれるし、ストーブの熱では意外に暖かい。ああ～助かった。凍えていた私は胸をなでおろす。小さなストーブの中では牛の糞がチロチロと青い炎をあげていた。年配の女性の方は海辺で見かけるデッキチェアのようなベッドで、小さな男の子と一緒にまだ毛布に包まっていた。裸んぼでテントの外に掘った穴にトイレを済ませていた5、6歳位の女の子は、私をみると恥ずかしそうに笑顔を見せた。

テントに戻ってきた女の子は洋服を着ると、今度は洗顔フォームを使い、溜めてある水で洗顔している。こんなテント生活をしている子供が洗顔フォームを使っているのは驚きだ。何かといえばチベット人は身体を洗う習慣が無いなどの話を聞いていたが、そんなのは嘘か昔の話だ。この土地のチベット族は温泉で入浴もすれば、テントで暮らす小さな子供でさえ洗顔フォームで顔を洗うのだ。お化粧品もしない彼女にはそんな物必要ないのではと思えたが……。

私はザックの中からいつでも持ち歩いている折り紙を取り出すと鶴や花を折り、突然現れた異邦人を興味津々で眺めている女の子にあげた。自分の姉が新しい遊び相手を得ているのを見た男の子も毛布に包まれた祖母(?)の胸の中から這い出してくる。子供は裸で寝る事になっているのかやっぱりスッポンポンだ。

私が子供達と遊んでいるのを微笑みながら眺めてはいたが、大人の女性二人は基本的に私には全く興味が無いようだった。「あなたは何をしてるの?」と聞かれ「鳥葬が始まるのを待ってるの」と答えると、「ああそ

う」といった様子でその後話しかけてくる事も無い。

どこへ行っていたのか子供達の父親らしい青年がバイクに乗って戻ってきたが、やはり私には興味を持つことなく、すぐにまた何処かへ出かけて行ってしまった。放っておいてくれる事は気楽で良かった。自分で歩き回れるようになったばかりといった年頃の男の子はなかなか腕白そうで、起きだしてくるとクキキキ……と笑いながら、テントの真ん中でオシッコをしたりする。彼の表情を見れば、明らかにそれが憚られる行為であることを判ってやっている確信犯だ。お姉ちゃんは「あー!」という顔をして口元に手をやると私を見て笑った。オシッコはすぐに土に吸い込まれてしまい、母親らしい女性はそれには構わずに子供に洋服を着せると食事を与えた。

子供達の朝食は昨日の残り物なのか、鍋に残っていたオシロイの様なものだ。腕白そうな男の子は旺盛な食欲で冷えたオシロイ(?)をスプーンですくってはモリモリ食べていたが、大人達の食事は麦焦がしのような粉を水で捏ねて食べるだけだ。あらかじめ得ていた知識でそれがツァンパと呼ばれるチベット民族の主食となる食べ物だとは判ったが、実際に彼等が食すところを見るのは初めてだった。それはどう見ても活動のエネルギーとして食物を摂取するだけの行為で、特別な日を除き彼等の日常生活に食の楽しみという物は存在していないように思われた。

あっという間に食事が終わると、母親は娘の髪の毛を頭の上で二つに分けて可愛らしい髪飾りのついたゴムで結び、日焼け止めか荒れ止めなのか、薄赤い色の付いた油のような物を頬に塗ってあげている。お化粧品が済んで私を振り返った少女の顔は頭の上にフワフワしたピンク色のポンポンを二つ並べ、ほっぺたが丸く真っ赤に染められた上に、唇も口紅のように赤く塗られている。

まるで舞台化粧のようなその可笑しさと可愛さに、私は声を上げて大笑いしてしまった。私が笑うので少女はわざとおどけた表情をして見せる。カメラを持っていなかったのが本当に本当に残念だ。男の子もほっぺたを赤く塗ってもらっている。二人とも目がキラキラしていてとっても可愛い。

いつの間にか日は高く昇っていた。子供達の世話を終えると女たちはテントの外に出て行ってしまい、腕時計を眺めると時刻は既に9時を過ぎている。時折表に出て鳥葬場の方を眺めていた私だが、運転手の情報はやはりガセだったらしい。それはそれで残念だったが、私はこのテントに来られた事ですっかり満足していた。

日が昇るにつれ気温が上がり、全く寒さを感じなくなったので雨合羽を脱ぎテントの表に出た。二人の女性達はテントの前に作られた畑で働いていた。私について外に出てきた子供達は早速その辺に落ちている木切れを使って遊び始めている。ふと見るとテントの脇に刃を上に向けた状態でクワが放り出しているのを見つけた私は、慌てて刃を下向きに置き直した。もし子供がその上に転んだりしたらと思うとゾッとする。小さな子供達がいるというのになんて無頓着なんだろう。ここの子供達を見ていたらやれ哺乳瓶の消毒だ殺菌だ、子供の喧嘩だ幼稚園の安全管理だと壊れ物を扱うような日本の子育てとの差に唖然とするが、これだけ放つぽり出されていても、子供達はノビノビと元気いっぱいに育っている。

子供と遊ぶのが好きな私は長い木切れを二本使い、小さな男の子を真ん中にして三人並ぶと、ポップーと電車ごっこをして見せた。ここの子供達は電車の存在など知らないだろうが、三人で二本の棒に捕まり歩き回るのが楽しくて子供達は大喜びだ。おもちゃなどなくても子供はそこにある物を使って遊ぶので、そんな物は必要無いのだと改めて気付かされた思いだ。これですっかり懐いてくれた子供達は私の手を引き、先に立ってテントの周りをあちこち案内してくれる。会話は全く通じないが、子供と遊ぶのに言葉など全然必要ない。

しかし辺りは草原とはいっても地面は平らではなく、湿原のような場所もあり小さな小川の流れる場所もある。小川の淵に身体を乗り出し、泳ぐ小魚を指差して見せてくれる様子や、まだおぼつかない足取りで、でこぼこした地面を歩く男の子の姿に、私はハラハラしっぱなしだ。つい手を出して引っ張ったり身体を支えたりしてしまうのだが、その度に余計な事をするな!とでもいう様にその手を振り払われてしまう。たとえ転んでも彼はへっちゃらだ。助け起こそうとした私はまた腕を振り払われる。

チベット東部に当たるこの地方一帯はチベット語で『カム』と称され、カムパと呼ばれる土地の男達はチベット族の中でも特に勇猛で誇り高い事に名を馳せているようだ。まだよちよち歩きの年頃にして、この少年も誇り高いカムの男だ。子虎を模したジャンパーを着せられているのが可愛らしく、幼いながらも野生の輝きを放つ瞳の彼が、虎の耳が付いたフードを被っている姿は、まるで本物みたいに野獣の子を連想させた。

子供達と走り回って遊んでいるうちに、あれ程寒かったのが嘘の様に暑くなってきた。太陽さえ昇ってしまえば、下界よりもその距離が近い分だけ8月の太陽の光

はジリジリと照りつけてくる。時間を見れば既に11時近くなっていた。子供達と遊んでいるのは楽しかったが、私がそこで過している意味も無くなったので、そろそろ街に戻る事にした。

ゼスチャーで自分が帰る事を子供達に伝えたと、途中まで送ってくれるつもりのように付いてくる。「じゃあ、あそこまでね」と鳥葬場とこちら側の境を目指し三人で手を繋いで歩いていると、少しテントから離れたところで、心配した母親の呼び声があったので、そこで子供達とは手を振ってお別れした。

子供達と過した時間の甘い余韻に浸りながらも私の胸の中は大きく揺れていた。大草原の中、つつましく畑を作り、牛を飼い、その牛の糞を燃料として暖を取る。木も切らなければ過剰な二酸化炭素を放出させる事もなく、自然のリサイクルの環の中で営まれる彼等の生活…ほんのちょっぴり垣間見ただけだが、彼等のテントを訪れて私が感じさせられたものはとても大きかった。

テントに入ります強印象を受けたのは、一つの家族が暮らす生活の場として、驚くほどに物が無かった事だ。

このように自然環境の厳しい土地でも、人間は本来これだけで暮らしていけるのだという事実を目の当たりにして、私は少なからず衝撃を受けていた。

改めて日本の生活を思い起こせば、私達の生活はどれだけ余計な物を抱え込んでいるのだろう。アレが無ければ、コレが無ければ・・・と不安を募らせ、物欲に溺れ、経済的な利益ばかりを追求しては、その挙句に取り返しつかないほどの環境破壊を引き起こし、自らの出したゴミの始末も付けられずに慌てふためく文明生活の愚かさ、滑稽さはどうなのだ。そんな人間の生活の皺寄せは地球上に住む他の自然動物達にまで甚大な被害を与え、今や地球さえ滅ぼしてしまいそうな勢いだ。

彼等の生活を貧しく遅れていると蔑み笑う文明国の人間は、頭を冷やすべきではないのか？地球の上で生かされている生物として生きるという事に、もっと謙虚にならなければいけないのではない？理塘の街を目指して歩く道すがら、私の胸の中にはそんな思いが取りとめもなく渦を巻いていた。(続く)